会がありました。その時はご病気であることを知りませんでしたが。しかし、私の中でもっとも鮮明に思い出されるのは、2004 年に京都で開催された、彼の退官のときの最終講義とその後の祝賀会でした。幸いにも私は、海外から招待されたチンパンジー学者たちの一人でした。私たちはすばらしい歓迎を受けました。圧巻は何と言っても、なんとも多くの大学の学徒・同僚らが、西田博士に対して尊敬の念を向けていることでした。

私たちはこの学問分野の中でもっとも偉大な霊長類学者の一人を失いました。日本と西洋双方の次世代の動物行動学者たちに彼が果たした多大な貢献、そして彼が残した遺産に、私たちは感謝せずにはいられません。

（翻訳：坂巻 哲也）

西田さんの背中

五百部 裕
椙山女学園大学

今、9 年ぶりにマハレに来ている。私が最初にマハレに来たのは 1995 年。その時、西田さんと数か月をともにした。私は幸運なことに、3 人の優れたフィールドワーカーと調査をともにすることができた。学部学生時代には、トカラ列島の口之島で野生化ウシの調査を行い、伊谷さんの背中を見て歩くことができた。大学院生時代には、旧ザイール共和国のワンバで、ピグミーチンパンジーを追って加納さんと一緒に森を歩いた。そして、マハレでは西田さんと過ごした。3 人はそれぞれ違ったやり方でフィールドワークを行っていた。伊谷さんは調査中に俳句を作り、それを私に披露してくれた。加納さんは黙々と森を歩き、私はただ黙って彼の後姿を見ながら歩いていた。そして西田さんは、チンパンジーの食べ物を味見しては、それを記録していた。伊谷さんと加納さんがジェネラリストだったのに対して、西田さんはスペシャリストだったように思う。西田さんの関心は常にチンパンジーに向いていた。彼は、チンパンジーの目を通して彼らの住む環境を理解しようとしていたのではないだろうか。しかし、3 人に共通する点もある。それは彼らがフィールドではあまり語らず、私は彼らのあとをただ歩くだけでフィールド調査のなんたるかを学ばなければならなかったことだ。彼らの後姿を見ながら歩き、彼らのやり方を見て、フィールドで必要なことを感じていた。西田さんの後姿を追いかけることができたからこそ、マハレにおいて重要なことを理解することができたのだ。また一人、こうしたフィールドワーカーがいなくなってしまった。これは当然のことながら日本の霊長類学にとって大きな損失だ。もし可能なら今一度西田さんの後姿を見ながら、マハレを歩きたかった。まだまだ西田さんから学ばなければならないことはたくさんあるのだから。しかしそれも叶わぬ夢となってしまった。たぶん西田さんに対する供養として私ができることは、こうしたフィールドワーカーに私が一歩でも近づくことだろう。とても西田さんの域に達することはできないだろうが。

追悼文

中村 美穂
アニカプロダクション／京都大学野生動物研究センター

初めてお目にかかったのは大学 3 年の霊長類学の講義。早口についていくのが大変でした。志賀高原のニホンザル実習でフィールドワークの楽しさを教えていただきました。マハレでチンパンジーを探して道なき山を登った時、群れには会えませんでしたが先生は満足そうでした。初めての場所、新しい科学的知見、今までにない考え。いつも目を輝かせる永遠の青年でした。

ンクングウェの威容に見送られて

保坂 和彦
鎌倉女子大学

早いもので、大学院に進学した 1991 年の 8 月、西田さんに連れられて、マハレ山塊を訪れてから 20 年もの歳月が経過しました。

私のチンパンジー調査人生は、西田さんに金魚の糞のようについて歩いた 10 日間に始まりました。一人で個体追跡するようになってからも、追跡対象のオトナ雄同士が一緒に歩くことが多いため、結局、彼の背後に付き従うはめになりました。当時、私には親子ほど離れた彼に遠慮があり、緊張していました。おまけにあの早口に合わせて喋ろうにも舌の回転が追いつかず、苦労しました。

しかし、私がチンパンジーの社会関係の面白さにすっかりはまると、彼は指導教官というより虫捕り仲間のような振る舞いを見せるようになりました。たとえば、3 頭のオトナ雄が一列縦隊で歩きながらパントフートを唱和したとき、全頭揃って片足を上げたまま凝固したことがありました。遠方からの返答に耳を澄ます反応です。彼はこの瞬間が面白くてたまらないという様子で、私を振り返り、チンパンジーを指さしました。その無邪気な表情がまた面白く、今でもよく思い出します。

当時のマハレ M 集団はまさに歴史の転換点でした。有名なアルファ雄ントロギが失脚して追放状態にあったのです。クーデターの主役カルンデは、同盟者であり互いにライバルでもあるベータ雄のシケ、ガンマ雄のンサバとの三者間関係を巧妙に操作しながら、新アルファ雄としての地位を保つとともにントロギの復帰を許さない状況をつくっていました。

ところが、西田さんが帰国の途についてまもなく情勢が変わりました。シケが病気で姿を消し、三者間関係の一角が崩れたのです。カルンデは、10 歳若いンサバの挑戦をまともに受けるようになり、やがて失脚して一人歩きを始めました。ここで、カルンデは融通無碍なチンパンジーらしさを発揮しました。彼は自分が追放したントロギを連れて群れに戻ったのです。カルンデの支持を得たントロギはアルファ雄として復帰しました。この連立政権にンサバは何もできず、ベータ雄の地位に甘んじました。

ソ連崩壊と同時に進行した一連の出来事を私は事細かに手紙にしたため西田さんに報告しました。それは彼が手紙をむさぼり読んでくれることが容易に想像できたということもありますが、これを観察しているのは私です、というメッセージを伝える意味もありました。彼は、必ずすぐに返事を寄越し、情勢の推移に大いに興奮していることを伝えてくれました。帰国直後の電話で、彼は「いやー君の手紙、じつに面白かった！」と言ったかと思うと、三秒ほど間をおいて「よくできました！」と小学生を褒めるかのような台詞を発せられました。そして、東京、お茶の水駅で落ちあうと、本郷の天麩羅屋に私を連れて行き、彼の好物、海老天丼をご馳走してくれました。

2007 年 2 月、大腸癌の手術をされてまもない西田さんと、講演準備の手伝いのため、東京のアニカプロダクションにてお会いしました。1989 ～ 1995 年頃のビデオを見ているとき、「思えばこの頃がいちばん楽しかったなあ」と呟かれました。M 集団のチンパンジーが十分観察しやすくなったことに加え、まだ観光客も少ない時期に、オトナ雄たちが立ち回りを演じてくれたことが痛快だったようです。いずれにせよ、そういう時期に彼に同行する機会を得た私は幸運でした。

2009 年 8 月、西田さんは 2 年ぶりのマハレ調査旅行を敢行しました。たまたま私と出発日程が重なり、往路の行程からマハレでの彼の 2 週間の滞在まで一緒に行動することになりました。私にはこれが西田さんの最後の調査となる予感がしました。しかし、本人は特別な感傷を漂わすことは一度もなく、いつも通り昂揚した様子でマハレまでの旅行を楽しまれていました。

マハレに着いた最初の数日間こそ、西田さんはせいぜい 2㎞南のンタレ川に着くだけで疲れた様子でしたが、日々調子を上げ、10 日目には 4 キロ以上南のルブルング川を渡るチンパンジーを観察しました。

チンパンジー調査の今回のテーマは子どもの遊びでしたが、いつもながら好奇心全開で何でも楽しんでおられました。彼が本誌に最後に報告した「パッフィー（9 歳雌）の乳首いじり（1990 年代に発見された新奇行動の一つ）の仕方は父親と推定されるアロフと同じだった」という観察は、偉大なチンパンジー学者の最後を飾るには小さすぎる発見ですが、『大型類人猿の権利宣言』（1993）に「チンパンジーはいつも新しい！」という名文句を残した彼らしい観察でした。

ある日、二人で公園北に隣接するカトゥンビとブヒングを回りました。すでに駐タンザニア日本大使館が検討を始めていたカトゥンビの簡易診療所建設計画のために現地住民の意見聴取と建設予定地視察をする目的でした。やはり大使館の草の根無償資金協力により建設したカトゥンビ小学校も訪問し、子どもたちの元気な様子を見ることができました。が、800 人超の生徒に対し教師 4 名という深刻な教師不足、机の不足、床の劣化など学校の窮状を目の当たりにし、真剣な表情で写真に収めていました。

カンシアナ滞在中、西田さんは終始機嫌よく、夜は少しのビールとタンガニイカ湖の魚、固い鶏肉あるいはヤギ肉などを楽しみました。食後はもちろん、恒例のヒトとチンパンジーの噂話です。たとえば、アルファ雄が肉分配や交尾の際に見せる個性的な行動について互いの観察を報告しあい、ときに爆笑しながら楽しく過ごしました。長い歳月は、私から遠慮を消し去っていたようです。

西田さんがマハレを発った 8 月 27 日の朝、カシハの浜で彼を見送ったのは私一人でした。かつてはカシハに滞在する大勢の人たちが、帰途につく研究者との別れを惜しむ光景がありましたが、公園当局が人の往来を厳しく管理するようになった今、それはありません。大勢のエコツアー客を乗せたボートは彼を拾うと、北に針路をとり、あっという間に小さくなりました。湖上の彼の視線の先にはカソゲの森林とその背後に聳えるマハレの連山がありました。46 年前と変わらない、その威容を見つめる彼の脳裏にかつてのカソゲが去来したか、来年の再訪を思ったか、今は知る由もありません。

西田さんとの最後の日

中村 美知夫
京都大学

2011 年 5 月 27 日、お亡くなりになる 10 日ほど前に西田さんのお宅を伺った。いくつか引き継いでおきたいことがあるから、という連絡をもらって伺ったのだが、結局それが西田さんにお会いした最後になってしまった。

4 月、5 月は私も新入院生向けの講義や実習などの担当が多く、それにかまけて一月ほどお見舞いに行っていなかった。一ヶ月ぶりにお会いした西田さんは、前よりもさらに痩せ、小さく見えた。私が行くとまずベッドに寝たまま迎える非礼を詫びられた。「耳が片方聞こえなくてね」とおっしゃっていたが、やり取り自体は非常にはっきりしておられた。